

国立国語研究所学術情報リポジトリ

第二言語としての日本語の文章読解における語用論的推論過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): text reading, relevance theory, pragmatic inference, proposition expressed, development 作成者: 佐藤, 智照, SATO, Tomoaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003688

第二言語としての日本語の文章読解における語用論的推論過程

佐藤智照

島根大学

要旨

本稿では、第二言語としての日本語の文章読解を語用論的観点から捉え、日本語学習者は、どのようにして書き手の意図に沿ったコンテキストを選び、書き手の意図した意味を理解しているのか、その際、どのような困難点があるのかについて検討を行った。具体的には、11名の中上級日本語学習者を対象に語用論的推論課題及びインタビュー調査を実施した。

その結果、日本語学習者が推論を行う際に用いるコンテキストは、文章の主題や言語的コンテキストだけでなく、コンテキスト的含意や文章の構成、言語的知識、背景知識など幅広いことが確認された。また、推論を行う際、複数のコンテキストを想定して複数の解釈を得たり、それらの解釈を当該の文章に当てはめて妥当性を判断することや、初めに得た解釈に対して意味的なつながりが保てないような新たな情報が与えられた場合、解釈の修正を行うことが確認された。一方、誤った解釈を行った日本語学習者は、複数のコンテキストを想定することが困難であり、特定のコンテキストのみを想定した解釈を行うことや、初めに得た解釈を修正したり、再解釈を行うことが困難であることが確認された。また、推論の方向性が明示的に示されない自由拡充では、推論の必要性に気づくことが困難であり、誤った解釈を行う可能性が高いことが確認された*。

キーワード：文章読解，語用論的推論，関連性理論，表出命題，発展

1. はじめに

言語的コミュニケーションには、話し言葉を通じたコミュニケーションと書き言葉を通じたコミュニケーションがある。本研究は、第二言語としての日本語における書き言葉を通じた言語的コミュニケーションに焦点をあてる。

言語的コミュニケーションは、送信者が表象（心に思い描いた事柄）を言語という伝達可能なコード（記号）に置き換えて発信し、受信者が受け取ったコードの解釈を基に相手の表象をメタ表象する（相手の表象を自身の心に思い描く）ことによって成立する。この過程を説明するコミュニケーションモデルの1つにコードモデルがある。コードモデルは、言語的コミュニケーションはコード化とコードの解釈によって成り立つとする立場のモデルである（Sperber & Wilson 1995）。言語的コミュニケーションにおいて、コード化とコードの解釈が欠かせないのは確かである。

*本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー：石黒圭)の研究成果である。なお、本稿は2021年9月8日に開催された共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」(石黒班)主催の「日本語学習者の文章理解過程データベース研究会」において「中上級日本語学習者のテキスト読解における語用論的推論—表出命題の理解方略と課題—」と題して発表した内容を基に加筆・修正したものである。本稿の執筆にあたり有益なご意見をくださった石黒圭教授に感謝申し上げます。また、本研究はJSPS科学研究費補助金(科研費)19K13233の助成を受けたものである。

ある。しかし、コードが示す意味は不完全なことが多く、言語的コミュニケーションがコード化とコードの解釈だけで成り立つケースは少ない。言語的コミュニケーションは、受信者が送信者の伝えようとしている意味を推論することに大きく依存している (Sperber & Wilson 1995)。

書き言葉を通じた言語的コミュニケーションにおいてコードのみによって示される意味は、書き手の表象を完全に伝達するものではない場合がある。このコードのみによって示される意味を「言語的意味」という。今井編 (2017) は、言語的意味は、ごく少ない例外を除けば、断片的で不完全であり、命題となっていないとしている。命題とは、それが表す内容が真か偽かを確かめることのできる言語形式のことである。

- (1) 人気のない観光地は寂しい。(人気とは世間の評判のことなのか、人の気配のことなのか)
- (2) 彼は、怠け者だ。(彼とは誰なのか)
- (3) 映画館に行ったら、ジョンに会った。(どこでジョンに会ったのか)
- (4) ステーキは、生だ。(肉に全く火が通っていないのか、部分的に火が通っているのか)

(1) から (4) の文の言語的意味は、括弧内の事柄を決定しない。括弧内の事柄が決定しないかぎり、読み手は書き手の表象を完全な命題形式で理解することはできない。このように言語的意味は、論理形式を表出するものであり、断片的な意味や複数の意味を示す場合がある。そのため、読み手は、先行する語句や文の解釈、背景知識、その他、読み手が利用可能な知識といったコンテキストを用いて、欠けている要素を補完したり、意味に制限を加えたりする推論を行う必要がある。読み手が利用可能なコンテキストは複数存在する。読み手は、その中から書き手の意図に沿ったコンテキストを選び出し、書き手の意図した意味を推論する必要があるのである。

今井編 (2017) は、コードによって伝達される言語的意味が常に正しいものであると保証されるのに対して、推論によって得られる意味は、常に正しいものであるとは保証されないとしている。つまり、コードによって伝達される言語的意味は、書き手と読み手の共有するコードが正確に用いられ、正常に送受信される場合、常に正しいものであることを保証する。言語的意味は、文法によって形成されており、コンテキストに左右されないため、意味論的といえる。一方、推論によって得られる意味は、読み手が適切と考えるコンテキストを選び、当てはめることで得られるものである。推論によって得られる意味は、コンテキストに依存しており、そのコンテキストは複数存在する。読み手が選択したコンテキストが、書き手が意図したコンテキストと異なる場合、結果として生じる解釈は、誤った解釈となる。したがって、推論によって得られる意味は、常に正しいものであることを保証しない。書き手の意図した意味は、推論によって得られ、コンテキストに依存するため、語用論的といえる。

推論によって得られる意味は常に正しいものであることを保証しないにもかかわらず、読み手は書き手の意図した意味を正確に理解し、メタ表象に成功する。読み手は、どのようにして、書き手の意図したコンテキストを選択し、書き手の意図した意味を命題の形式で理解するのであろうか。この問いに対して Sperber & Wilson (1995) は、「関連性」という独自の概念を用いた「関連性理論」による説明を行っている。関連性理論は、人間の認知特性の観点から説明を試みても

のであり、語用論を代表する理論の1つである。

本研究では、関連性理論に立脚し、第二言語としての日本語の文章読解について語用論的観点から検討を行う。具体的には、日本語学習者は、どのようにして書き手の意図に沿ったコンテキストを選び、書き手の意図した意味を理解しているのか、その際、どのような困難点があるのかについて実証的に検討を行う。本研究によって得られた知見は、日本語学習者の文章読解過程の特徴の解明や、その特徴を踏まえた指導を考える際の基礎的データとなると考えられる。

2. 先行研究

2.1 日本語学習者のコンテキストを用いた文章理解

本研究の課題に取り組むにあたり、日本語学習者の文章読解における読み誤りを調べた研究や文脈情報を用いた文章理解過程について調べた研究が有益な示唆を与えてくれる。

日本語学習者の読み誤りについて調べた研究では、コンテキストの選択が正しく行われず、書き手の意図した意味の推論に失敗する事例が報告されている。具体的には、1) 省略されている語句や指示詞、代名詞の照応先の語句を適切に特定できないケース（野田・花田・藤原 2017, 藤原 2017a, 藤原 2017b）、2) 意味が広い語や多義語など複数の解釈が可能な語についての解釈が不適切になされたり、未知語について辞書にある語義から書き手の意図に沿った語義と異なる語義が選択されるケース（野田 2014, 野田・花田・藤原 2017, 藤原 2017a, 藤原 2017b）、3) 背景知識に影響を受けて文の理解が不適切になされたり、自身の持つ背景知識と本文との関連づけが不適切になされるケース（野田 2014, 野田・花田・藤原 2017, 藤原 2017b）がある。

これらの読み誤りの報告を受け、日本語学習者の文脈情報を用いた文章理解過程を実証的に研究し、まとめたものに石黒編（2020）がある。石黒編（2020）では、日本語学習者は、多義語の意味をどのように限定し、未知語の意味をどのように推測するのか、また、指示詞や接続詞の結束性をどのように把握するのかについて検討が行われている。多義語の語義解釈については、和語動詞、外来語、固有名詞、空間・数量を表す語について検討が行われている（烏・Dang 2020, 劉・Nguyen 2020, 蒙・Nguyen 2020, 布施・Dang 2020）。これらの検討では、日本語学習者が様々な文脈情報を駆使し、文章読解を行う様子が報告されている。しかし、調査で扱われた語の多くが、調査に参加した日本語学習者にとって未知語または未知語か否かの判断に迷うものであった。そのため、これらの検討は、主に未知の多義語の意味推測の検討となっている。

また、接続詞については、石黒編（2020）に収録されている井伊・宮内（2020）において、日本語学習者と日本語母語話者を対象に接続詞による後続文脈の絞り込みの過程について調査が行われている。その結果、日本語学習者間だけでなく日本語母語話者間でも回答にばらつきが生じたことが報告されている。また、日本語母語話者間の回答のばらつきは、接続詞そのものではなく、前後の文脈の捉え方に起因している可能性が高いのに対して、日本語学習者間の回答のばらつきは、接続詞そのものの理解に起因している可能性が報告されている。日本語学習者は、同義の接続詞が母語には存在しないにもかかわらず母語の接続詞に置き換えたり、形式の似た他の言語形式と間違えて理解していることが報告されている。

さらに、石黒編（2020）に収録されている田中・宮内（2020）では、日本語学習者と日本語母語話者を対象に文脈指示の理解についての調査が行われている。その結果、日本語学習者は、指示語の指示対象は前方あるいは直前にあるという認識を強く持っており、指示語の前にある語の中でもより指示語に近いものを選択して誤った解釈を行ったり、後方照応の用法で指示詞が用いられている場合でも指示対象は指示語の前にあるという認識を崩さないため、誤った解釈を行ったケースが報告されている。さらに、語彙知識が不足していたり、部分的に語を読み飛ばして読み進めるがために、誤った解釈に至るケースも報告されている。加えて、自身の解釈に疑問を持ちながらも、最初に行った解釈を修正できない日本語学習者の存在も報告されている。また、日本語母語話者であっても、文章中に決定的な手がかりを求めることができず、常識的に判断せざるを得ない場合、指示語が指す対象の解釈が分かれることが報告されている。

石黒編（2020）からは、第二言語としての日本語の文章読解において、日本語学習者は様々なコンテキストを用いて文章読解を行っていることがわかる。また、第二言語としての日本語の場合、推論を行う際のコンテキストの選択以前に、言語的知識の不足や偏った言語的知識の使用、部分的な読み飛ばしによって、コード解読や言語的意味の理解で問題が生じ、誤った解釈に至る可能性が高いことがわかる。この点は、第一言語と第二言語の違いと言える。また、文章中に決定的な手がかりを求めることができず、常識的に判断せざるを得ない場合、背景知識が不足していたり、書き手との常識的想定との共有ができていない日本語学習者は、解釈が困難となり誤った解釈に至る可能性が高いことがわかる。さらに、誤った解釈を行った後に再解釈を行い、修正を行うことが困難である可能性が高いと考えられる。

2.2 言語的決定不十分性と関連性理論

既述したように、言語的意味は、話し手または書き手が伝えようとしている意味を十分に決定しない。Carston（2002）は、これを言語的決定不十分性のテーゼとしている。

(5) 彼は、そう言った。

(5) は、このままでは真偽値を問える完全な命題とは言えない。それは、下線部の代名詞「彼」が具体的に誰を指し、指示詞「そう」が何を指しているのかが明らかではないためである。

(6) Jones has bought the Times. (ジョーンズはタイムズ紙を買った。)

(7) Jones has bought a copy of the Times. (ジョーンズはタイムズ紙を一部買った。)

(8) Jones has bought the press enterprise which publishes the Times. (ジョーンズはタイムズ紙を発行する新聞社を買った。)

(Sperber & Wilson 1995: 15)

(6) の文は、(7) や (8) という意味の解釈が可能である。(6) で書き手が意図した意味を決定するためには、下線部「the Times (タイムズ紙)」の曖昧性を除去しなければならない。

このように、言語的意味は、真偽値を問える完全な命題ではない場合がある。読み手が書き手の伝えたい表象をメタ表象するためには、言語的意味と書き手の表象の間の隔たりを埋めなけれ

ばならない。この隔たりを埋めるために読み手は、推論を行う。この推論をコミュニケーションモデルに取り込み、コミュニケーションを認知的観点から説明した理論が、Sperber & Wilson (1995) の関連性理論である。

関連性理論では「意図明示推論的コミュニケーション」というコミュニケーションモデルが示されている。このモデルの特徴は、コードと推論の2つの要素を取り入れていることと、コードモデルと違い送信者と受信者が行う処理が非対称的であることである (内田 2013)。このモデルでは、理解過程を解読のプロセスと推論のプロセスに分けている。解読のプロセスは、話し手または書き手によって特定の語彙形式、統語形式でコード化された内容を聞き手または読み手が解読する過程を指す。

(9) 部長は取締役会で、A氏をプロジェクトのリーダーにすることを報告した。報告を聞いた社長は、「彼は若すぎる。」とだけ言って、次の議題へと話を移した。

(9) の下線部「彼は若すぎる。」を「ある男性は何かの事柄を行うには年齢が若すぎる。」と解釈する過程が解読のプロセスである。この解読のプロセスによって得られた言語的意味は、真偽値を問える完全な命題ではない。これを完全な命題とするためには、欠けている構成素を語用論的に推論しなければならない。この過程が推論のプロセスである。

推論のプロセスを経て得られる想定には、「表出命題」と「推意」の2つがある (Carston 2002)。表出命題は、書き手によって明示的に伝達された想定であり、言語的意味を基に語用論的に推論し、肉付けしたり、意味に制限を加えたり、補完したりすることを通して得られる。関連性理論では、この処理を「発展」という。(9) の下線部「彼は若すぎる。」の「彼」と「若すぎる」について、読み手は先行する文や語句の解釈、背景知識を用いて発展を行い、「A氏はプロジェクトリーダーを務めるには年齢が若すぎる。」と想定する。この想定が表出命題である。ここでは、言語的意味は、論理形式を表出するものとして機能する。読み手は、この命題断片的な論理形式をコンテキストに基づいて完全な命題へと完成させるのである。

一方、推意は、非明示的に伝達される想定を指す。(9) を理解する場合、下線部「彼は若すぎる。」について、表出命題を理解しただけでは書き手が意図することを理解したとは言い難い。ここでは、発展を行って得られた表出命題を基に、背景知識を用いて「社長は、部長にA氏がプロジェクトリーダーになることに反対であることを伝えた。」と想定する必要がある。この想定が推意である。推意は、表出命題を前提としながら主に背景知識を基とした推論を行うことによって形成される。言語的意味を発展させて得られる想定が表出命題であり、表出命題を基盤に推論を行って得られる想定が推意である。

このように、関連性理論の意図明示推論的コミュニケーションでは、コード解読によって得られる言語的意味を論理形式として捉え、この論理形式を基盤にコンテキストを用いて表出命題を得たり、表出命題を基盤とした推意を得るとされている。

関連性理論でいうコンテキストとは、実際に用いられる心的に表示された複数の想定を指す(今井編 2017)。コンテキストには、物理的環境や先行する語句、文の解釈だけでなく、文化的知識

や科学的知識、常識的想定、書き手と読み手が共有する認識など、読解時に読み手が想起可能、呼び出し可能な要素の全てが含まれる。私たち読み手は、数あるコンテキストの中から適切なコンテキストを選択し、そのコンテキストを言語的意味が示す論理形式に当てはめて表出命題を形成したり、推意を得たりすることを通じて書き手の表象のメタ表象を行っているのである。

2.3 関連性理論における発展

関連性理論の「発展」の手段には、以下の4つがある (Sperber & Wilson 1995, Carston 2002)。

1つ目は、「曖昧性の除去」である。曖昧性の除去は、多義語といった複数の意味解釈が可能な語や句についてコンテキストによって1つに調整するタイプの処理である (内田 2013)。例えば、「人気」「市場」といった語は、多義的であり、当該の文章に沿った意味を選択する必要がある。

2つ目は、「飽和」である。飽和は、指示詞や代名詞の値を決定したり、省略された語句など言語形式により要求される値や要素をコンテキストによって補うタイプの処理である (内田 2013)。

(10) メアリーが帰宅するとジョンが酒を飲んでいた。彼女は、彼に「真っ赤だよ。」と言った。

(10) の下線部「彼女は、彼に「真っ赤だよ。」といった。」は、これだけでは真偽値を問える命題とは言えない。完全な命題とするためには、代名詞「彼女」と「彼」が誰を指すのか、「真っ赤だよ」は、「何が真っ赤なのか」を補う必要がある。これらの処理が飽和である。

3つ目は「自由拡充」である。自由拡充は、飽和のように特定の言語要素の要求ではなく、自由に語用論的に要素を補うことである (東森・吉村 2006)。

(11) (夕食の誘いに対して) 私は夕食を食べました。

(12) (夕食の誘いに対して) 私は、既に、夕食を食べました。

(11) の下線部「私は夕食を食べました。」は、「私」が誰か、また発話が行われたのがいつかが特定される場合、それだけで真偽値を問える命題となる。しかし、読み手は、(12) のように「既に」という要素を補足し、より特定化した理解を行うであろう。これが自由拡充である。

4つ目は、「アドホック概念構築」である。アドホック概念とは、その場限りの意味を指す。例えば、「コップが空だ。」という文の「空」は、辞書的定義では「全く何もない状態」を指すが、この文ではコップの底に少し液体が残っている状態であっても偽りとは認識されない (岡田 2011: 36)。このアドホック概念は、語彙的縮小と語彙的拡張に分けられる。岡田・井門 (2014) によるとアドホック概念の語彙的縮小は、符号化された概念よりも限定的な概念が伝達される場合を指し、語彙的拡張は、符号化された概念を拡張した概念が伝達される場合を指す。

(13) 悪いけど、今、熱があるんだ。

(岡田・井門 2014: 7)

(14) Here's my new flatmate. [referring to newly acquired cat] [これが私の同居人です。[新しく手

に入れた猫を指して]

(Carston 2002: 488)

(13) の下線部「熱」は、何度であっても温度さえあれば「熱がある」ということになるが、友人にジョギングに誘われたという状況で誰かが発した場合、「平熱よりも高い熱」という意味となり、概念の縮小がなされる。(14) の下線部「*flatmate* (同居人)」は、非人間を含まないが、この文では非人間である猫を含めた概念へと拡張がなされている。

2.4 関連性の原理と関連性理論に基づく解釈の手順

読み手が表出命題を得たり、推意を得るためには、書き手の意図に沿ったコンテキストを選択する必要がある。読み手は、複数あるコンテキストの中から、どのような基準を基に、コンテキストを選択するのであろうか。関連性理論では、可能な解釈を評価する基準は人間の認知に関する基本的な想定にあるとされている。その基本的な想定が、関連性である。

Sperber & Wilson (1995) は、以下の2つの原則を示している。(15) は関連性の第一原則、(16) は関連性の第二原則である。

(15) 人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。

(16) すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適の関連性を見込みを伝達する。

(Sperber & Wilson 1995: 318)

関連性の第一原則は、認知に関するものである。この原則では、人間の認知システムは、知覚、記憶、推論ともに、自分にとって潜在的に関連性のある情報を取り出す性質を有していることを述べている(今井編 2017)。ここでいう関連性とは、単純に意味的關係があるということではない。Sperber & Wilson (1995) は、関連性について以下のような定義を行っている。

(17) 関連性

ある想定がある文脈中で何らかの文脈効果をもつとき、そしてそのときに限りその想定はその文脈中で関連性をもつ。

(Sperber & Wilson 1995: 147)

(18) 関連性

程度条件 1: 想定はある文脈中での文脈効果が大きいほど、その文脈中での関連性が高い。

程度条件 2: 想定はある文脈中でその処理に要する労力が小さいほど、その文脈中での関連性が高い。

(Sperber & Wilson 1995: 151)

関連性理論では、関連性の有無に文脈効果と処理労力が関わるとされている。文脈効果とは、認知環境の改善が得られることを指す。人間の頭の中にある情報には、確かな情報だけでなく、不確かな情報や誤った情報が含まれている。ここでは、これらの情報を総じて「想定」という。人間は、自分の持つ想定を増やし、不確実な想定を確実なものとし、誤った想定については正しい想定に切り替えることを常に願っており、常に認知環境の改善を求める性質を有している(今井 2009)。関連性理論では、新情報がコンテキストと相互作用し、認知改善、つまり文脈効果を

持つ場合に関連性があるとされる。ここでいう新情報とは、知覚あるいは言語解読、すなわち、入力体系から派生する新たに提示された情報のことである。この新情報は、処理される過程で古くなるという性質を有している。読み手は、それまでに得た前提となる想定に新情報を付加して、新たな想定を得る。この想定は、次の新情報が入力され、処理され始めた瞬間に旧情報となる。このような新情報の処理において前提となる想定をコンテクスト的想定という（今井 2009）。

関連性理論における文脈効果を持つ場合とは、新情報がコンテクスト的想定を含む古い想定に、さらに証拠を与え、その想定を強化する場合、また、新情報がコンテクスト的想定を含む古い想定と矛盾し、誤った想定を放棄する場合、そして、新情報がコンテクスト的想定と結びつきコンテクスト的含意という新たな想定を引き出す場合の3つである（今井 2009）。コンテクスト的含意とは、新情報とコンテクスト的想定の結びつきから論理的に引き出される結論のことである。逆に、前述した3つに当てはまらない情報は、文脈効果を持たないことになる。すなわち、新情報を提供していても、その情報が既存のどの想定とも結びつかない場合、また、新情報が既存の想定の高さに影響を与えない場合、そして、新情報が想定と食い違っている場合、既存の想定を覆すには弱すぎる場合である。

(19) 山田は、長年、会社を経営してきた。最近、山田は、自分の息子に席を譲った。

(19) の下線部「席を譲った」は、「席に人を座らせる」という解釈もコンテクストによっては可能であるが、この場合、「地位を譲る」という解釈が読み手にとって文脈効果の大きい解釈となる。「地位を譲る」と解釈した場合、読み手は、第一文で得た想定に第二文の新情報を結びつけることで「現在、山田は会社を経営していない。」というコンテクスト的含意を引き出すことができるからである。「席に人を座らせる」という解釈は、この場合、第一文で得た想定と結びつかず、文脈効果を持たない解釈となる。

(20) 山田は、東京大学の学生である。山田は、東大生である。

(20) の下線部は、第一文に対して文脈効果を持たないと判断される。それは、下線部の想定が既に第一文で読み手が得たものであり、その想定の高さに全く影響を与えないためである。

もう1つ関連性の有無に関わる要素として処理労力がある。処理労力とは、文脈効果を得るために必要となる労力であり、処理労力が低ければ低いほど関連性が増すとされている（今井編 2017）。処理労力に影響を与える要因には、最近使われたかどうか、頻繁に使われるかどうか、言語的または論理的に複雑かどうかがある。より最近使われている事柄、より頻繁に使われる事柄、より言語的または論理的に複雑ではない事柄は処理労力が低く、関連性があると判断される。この処理労力の考え方には、(21) の伝達に関する関連性の第二原則が関わっている。

(21= (16)) すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適の関連性を見込みを伝達する。

(Sperber & Wilson 1995: 318)

また、Sperber & Wilson (1995) は、最適な関連性を見込みについて以下のように説明している。

(22) 最適な関連性の見込み

- (a) 意図明示的の刺激は受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。
 (b) 意図明示的の刺激は伝達者の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。
 (Sperber & Wilson 1995: 331)

つまり、書き手が伝達の意図を顕在化させて表象の伝達を行う場合、その文章は、読み手に対して文脈効果につながる情報が不要な労力を払うことなしに得られるということと呼びかけることにはかならない(今井 2009)。そして、読み手は、書き手が処理労力を最小化する伝達手段を用いているはずであると期待するのである。Sperber & Wilson (1995) は、コンテキストの呼び出し可能性が低いほど、それを呼び出すのに必要な労力は大きくなり、呼び出し可能性が高いほど、労力は少なくなるとしている。

(23) 山田は、冷たい。

(23) について、読み手の多くは「性格が冷淡」という意味で解釈するだろう。これは、人物に対して「冷たい」という語を用いる場合、性格について言及することが多く、コンテキストの呼び出しに、それほど労力を要さないためである。「温度が低い」という解釈も可能ではあるが、その場合、コンテキストを呼び出すのにかかる労力は大きくなる。

最適な関連性の見込みに基づいた具体的な解釈の手順は、以下のようにまとめられる。

(24) 解釈上の仮説を、その呼び出し可能性の高い順にチェックせよ。

- すなわち、労力が最も少なくて済むものから始めて、関連性の期待を満たす解釈に行き当たるまで進め。そこで、停止せよ。
 (Carston 2002: 68)

関連性理論に基づいて、書き言葉を通じた言語的コミュニケーションが、どのようにして成立するのかを説明すると以下ようになる。書き言葉を通じた言語的コミュニケーションにおいて、読み手は、数あるコンテキストの中から最も処理労力がかからない呼び出し可能性が高いものから順に選び、言語的意味が示す論理形式にコンテキストを当てはめる。そして、そこで期待を満たす最大の文脈効果が得られた場合、その解釈が書き手の意図した意味であると判断して、推論をやめる。このようにして、読み手は、複数存在するコンテキストの中から、書き手の意図に沿ったコンテキストを選択し、書き手が伝えようとしている意味を理解するのである。

ただし、期待を満たす文脈効果が得られたとしても、その解釈が間違っていた場合、初めの解釈が変更されることがある。今井編 (2017) では、袋小路発話といった関連性の期待を満たすものとしてある解釈を受け入れた後で、その解釈が実は間違っただけであるとわかるような場合、新たな証拠が与えられることによって、初めの解釈が変更されるとされている。

2.5 テキストと結束性

書き手が伝達の意図を顕在化させて表象の伝達を行う場合、書き手は読み手が不要な処理労力

をかけることなく文脈効果が得られるように文章を構成する。その際、書き手が用いる伝達手段の1つに結束的手段がある。

Halliday & Hasan (1976) は、テキストのテキスト性 (texture) を創り上げるのに決定的に重要で特殊な意味関係として、結束性を挙げている。テキストとは、意味的まとまりを持つ言語単位のことである。Halliday & Hasan (1976) によると、テキストには、話し言葉か書き言葉かといったモダリティーの制限や、語か文かといった長さの制限はない。テキストとは、語や文といった形式の単位とは異なり、本質的には語や文によって実現された意味の単位を表す。テキストのある要素の解釈が、別の要素の解釈に依存する場合、その2つの要素間に結束性が成立する。

Halliday & Hasan (1976) は、結束性はテキスト形成のための十分条件ではないが、必要条件であるという立場を示した上で、結束性はテキストの1つの部分と他のもう1つの部分との間に存在する連続性を表すとしている。実際の言語的コミュニケーションでは、書き手は、テキスト性を合図するために様々な結束的手段を用い、読み手はテキスト性を解釈するために結束的手段に反応する。この結束性は、指示、代用、省略、接続、再叙、コロケーションといった手段で表現される (Halliday & Hasan 1976)。以下に、それぞれの例を示す。

- (25) これから図書館で本を借りる。それを持ってカフェに行く予定だ。(指示)
- (26) 市場に魚を買いに行った。いいのはすべて売り切れていた。(代用)
- (27) 山奥に羊飼いが住んでいる。φ毎日、羊を連れて村まで下りてくる。(省略)
- (28) 姉は大学に進学した。しかし、1年で大学を辞めてしまった。(接続)
- (29) 家の前に男が立っていた。男は、私に近づき、こう言った。(再叙)
- (30) 庭にヤマボウシの木がある。青々とした葉は、日差しを遮ってくれる。(コロケーション)

ここで挙げられている結束的手段は、それ自体で意味解釈がなされるものではない。テキストのある項目を解釈しようとする際に、テキストの他の項目を参照しなければならないところに結束性が見いだされるのである。例えば、(29) では、第二文の「男」という前提に対して、第一文の「男」という別の要素が存在し、前提「男」が第一文の「男」と同一であることが認識されることによって、2つの文の間に結束性が生じる。このように、前提が存在するだけでは十分ではなく、その前提はさらに満たされなければならない。Halliday & Hasan (1976) は、これらの結束的手段によって、テキストの存在や範囲が合図されるだけでなく、読み手がテキストを解釈することが可能となり、どのようにしてそうするのも決定されるとしている。

Wilson & Sperber (1993) は、コード化されるものについて、概念をコード化するものと手続きをコード化するものの2つに分けている。概念をコード化するものは、表出命題を表す概念表示の構成要素となるものである。名詞や動詞、形容詞などのいわゆる内容語の大部分は、概念をコード化するものである。一方、手続きをコード化するものは、概念表示の構成要素となるものではなく、概念表示の推論の方向性を指し示すものである。指示詞や代名詞、接続詞などは手続きをコード化するものである。この点について Wilson & Sperber (1993) は、以下の例文を用いて説明をしている。

- (31) Peter told Mary that he was tired.
- (32) a. x told y at t_1 that z was tired at t_2 .
- b. Peter Brown told Mary Green at 3:00 p.m. on June 23 1992, that Peter Brown was tired at 3:00 p.m. on June 23 1992. (Wilson & Sperber 1993: 9)

(31) の論理形式を示したものが (32a) である。(32a) の「told」や「tired」といった語は、論理形式の構成要素となる概念をコード化している。(31) の代名詞「he」は、そのままでは概念表示の構成要素になりえない。代名詞「he」は、手がかりが環境のどこかにあるという明示的な合図を示すものであり、手続きをコード化している。概念をコード化するものと手続きをコード化するものの両方の処理を行って得られるものが (32b) である。

Halliday & Hasan (1976) の結束的手段は、手続きをコード化するものであり、読み手を書き手が意図した文脈効果を生み出す方向に方向づけ、必要とされる処理労力を少なくすることで貢献していると考えられる。ただし、結束的手段は、指示や代用、省略のように、解釈する手がかりが環境のどこかにあることを明示的に合図するものもあれば、接続のように後続する語句が先行する語句に体系的に結びつけられる仕方を指定するもの、そして、再叙やコロケーションのように、明示的に合図するものではないにしても、結束的效果を認識させる機能をもつものもある。そのため、これらの明示性の違いによって、方向づけに貢献する度合いが異なる可能性が高い。特に第二言語としての日本語の場合、井伊・宮内 (2020) や田中・宮内 (2020) の研究で観察されているように、読み手の言語的知識の不足によって書き手が意図した方向づけとは異なる理解が行われる可能性が高い。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、日本語学習者は、どのようにして書き手の意図に沿ったコンテキストを選び、書き手の意図した意味を理解しているのか、その際、どのような困難点があるのかについて明らかにすることである。具体的には、中上級日本語学習者に関連性理論の発展の4つの手段について問う課題を与え、それぞれの課題について、どのようにしてコンテキストを選び、書き手の意図する意味の理解を行ったのかをインタビュー法を用いて調べる。

4. 方法

4.1 調査協力者

日本国内の大学に在籍する中上級日本語学習者 11 名であった。国籍と母語、日本語習熟度 (TTBJ: Tsukuba Test-Battery of Japanese の結果) を表 1 に示す。習熟度の評定は、TTBJ の得点の解釈に基づいて行ったものである。

表1 調査協力者の国籍と日本語習熟度 (SPOT の点数と評価)

協力者	国籍 (母語)	日本語習熟度 (各テストの点数と評価)		
		[SPOT90]	[Grammar90]	[漢字 SPOT50]
A	マレーシア (マレー語)	74 (中級)	75 (中級)	34 (中級)
B	ベトナム (ベトナム語)	73 (中級)	83 (上級)	44 (上級)
C	中国 (中国語)	76 (中級)	61 (中級)	47 (上級)
D	中国 (中国語)	78 (中級)	59 (中級)	46 (上級)
E	中国 (中国語)	74 (中級)	65 (中級)	36 (中級)
F	マレーシア (中国語)	72 (中級)	65 (中級)	42 (上級)
G	中国 (中国語)	70 (中級)	64 (中級)	43 (上級)
H	中国 (中国語)	76 (中級)	72 (中級)	49 (上級)
I	マレーシア (マレー語)	69 (中級)	68 (中級)	36 (中級)
J	中国 (中国語)	81 (上級)	73 (中級)	46 (上級)
K	韓国 (韓国語)	82 (上級)	86 (上級)	46 (上級)

4.2 材料

文章は全部で7つであった。文章の長さは165字～249字で、全て調査者の書き下ろしであった。調査で用いた文章を表2に示す。7つの文章について「日本語読解学習支援システム リーディングチュウ太」の使用語彙の難易度評定を用いて、「とてもやさしい」「やさしい」「ふつう」「少し難しい」「難しい」の5段階で評定した。その結果、「とてもやさしい」が4つ、「やさしい」が3つであった。文章中の下線部は、語用論的推論が求められる箇所である。また課題で用いる文章は、語用論的推論を求める箇所以外は全てにルビを振った。

表2 調査で用いた文章

文章1 曖昧性の除去 (同形異音語) [やさしい] 165字	<p>わたくし かいしゃの ろくがつは ざんぎょう げっかん である。「<u>ノー残業</u>」、つまり、<u>残業</u>をせずに会社で決められた仕事の<u>終わり</u>時間を守り、<u>家</u>に帰るように働きかける<u>取り組み</u>だ。<u>一旦</u>、社員に説明のチラシが配られ、次の日から始まった。これは<u>三十日</u>まで行われる。私は、この取り組みはアイデアは良いが、<u>実際にやるとなると難しい</u>のではないかと<u>おも</u>っている。</p>
文章2 飽和 (代名詞) [とてもやさしい] 168字	<p>うまれてから一度も恋人がいなかったが、そんな私にも最近恋人ができた。妹にも恋人がいて、<u>彼</u>は、駅の近くの不動産屋で働いている。その人から、紹介してもらったことがきっかけである。今日は、<u>彼</u>とデートの日だ。しかし、こんな日にかぎって、<u>体調</u>が悪い。いつもそうだ。遠足の日、<u>高校入試</u>の日、<u>たの</u>しみにしている日や大切な日にかぎって、<u>体調</u>をくずしてしまう。</p>

文章3 飽和 (指示詞)

[とてもやさしい] 171 字

ある日の午後、私は駅にあるカフェで、注文したコーヒーを待っていた。明日の夕方までに終わらせなければならない仕事があったが、妻から駅まで迎えに来てほしいと頼まれたのだ。仕方がない。ここで待ちながらそれまでに仕事を終わらせよう。そう思っていた。すると突然、親友の裕太から電話がかかってきた。電話に出ると、今から会えないかという内容だった。

文章4 飽和 (省略)

[やさしい] 188 字

友だちと韓国料理を食べに行ったときの話だ。ご飯を食べながら楽しくお酒を飲んでた。すると突然友だちが「大丈夫？ 真っ赤だよ。」と言った。私は、お酒に強いほうではない。その日は、いつもよりお酒を多く飲んでた。「飲みすぎてしまったみたいだ。」と答えると、「いや、お前、辛いのが苦手だったろ。このスープかなり辛そうだけど。」と言った。「あ。うん。これぐらいなら大丈夫。」とだけ答えた。

文章5 アドホック概念 (語彙的拡張)

[とてもやさしい] 211 字

私が、会社に入った時のことだ。なかなか仕事にできない私に先輩が、おすすめの仕事のやり方を教えてくれた。そのやり方とは、いまある仕事の順番を考えて、頭の中で整理することだ。「重要かどうか」と「急いでしなければならないか」を考え、仕事を4つの箱に分ける。そして「重要で急いでしなければならない仕事」を最初に、そして「重要ではなく急いでいない仕事」は後でやるようにするのだそう。いつも、このように分けているのだそう。

文章6 アドホック概念 (語彙的縮小)

[やさしい] 249 字

「君のところは、いつボーナスがでるの。ボーナスをもらったら何に使うの。」ボーナスの時期になると、サラリーマン同士が話しているのをよくみる。日本では、夏と冬に、月々の給料のほかにボーナスをもらう。ボーナスの平均は、夏は38.4万円、冬は39万円である。海外では、どうかというアジアの国々では、日本と同じようにボーナスがある国が多い。しかし、ヨーロッパでは、ボーナスがない国もあるようだ。ヨーロッパの人とボーナスについて話すときは、「君のところは、ボーナスがあるのかい。」という質問から始めなければならない。

文章7 自由拡充

[とてもやさしい] 168 字

春がくると思い出すことがある。私が新入社員の時のことだ。当時の部長に「今晚、あいてる？ 酒でも飲みに行こう。」と言われ、「はい！ よろしくおねがいします。」と元氣よく答えた。部長が部屋を出ていったのを確認して、先輩が「部長、飲むよ。」とこっそり教えてくれた。先輩の言ったとおり、その日は、なかなか家に帰らせてもらえず、タクシーで家に帰った。

4.3 手続き

調査は、個別形式で行い、語用論的推論を求める課題（以下、語用論的推論課題）、事後インタビュー、TTBJの順番で行った。

語用論的推論課題では、文章の下線部について語用論的推論を行うことを求めた。課題は、以下のような手順で行った。まず、調査者は協力者に対して、「これから7つの文章を1つずつ渡します。文章中には下線部があります。文章を読んで、その下線部が具体的に何を指しているか。または、どのような意味で用いられているのかについて考えてください。次に、私が答えと理由について質問をします。答えは何か、どうしてそのように考えたのかについて詳しく教えてください。」と教示を行った。次に、手順に慣れてもらうために練習課題を1問与えた。練習課題は、本調査と同様の手順で行われた。最初に、調査者は、協力者に対して文章を1つ提示し、文章中の下線部が具体的に何を指しているのか、またはどのような意味で用いられているのかについて考えるよう教示した。その後、協力者は与えられた文章を読み、語用論的推論に取り掛かった。協力者が推論を終えた時点で、調査者は、協力者に推論を行って得た答えと、そのように推論した理由についてインタビューを行った。調査者によるインタビューは、協力者が推論した答えと、その理由を確認することだけに留め、正しい答えを提示したり、深く質問することはしなかった。このような流れで練習課題を実施した後、同様の手順で本調査を行った。

7つの文章全ての語用論的推論課題が終わった後、事後インタビューを行った。事後インタビューでは、語用論的推論課題のインタビューで不明確であった事柄についての説明を求めたり、正しい答えを提示し、なぜその答えを選択しなかったのかについて質問を行った。

最後に、TTBJを実施した。TTBJでは、総合的な日本語能力を測定するSPOT90、文法項目の知識を測定する文法90、漢字語彙処理能力を測定する漢字SPOT50を実施した。

語用論的推論課題におけるインタビュー及び事後インタビューでの調査者と協力者のやりとりは全て日本語で行った。全てのやりとりは録音され、その後、調査者を含む日本語母語話者2名によって文字化が行われた。

5. 分析結果と考察

5.1 曖昧性の除去

文章1は、曖昧性の除去が求められる文章であった。下線部「一日」は概念をコード化するのである。また、同形異音語であるため、読み手は文章に合った意味を選択する必要がある。表3に回答の分布を示す。

表3 曖昧性の除去における回答分布

		回答				
文章1 曖昧性の除去	a. 一日 (ついたち)	9名	b. 一日 (いちにち)	1名	c. 前の日	1名

正答である「a. 一日(ついたち)」と答えた協力者は9名であった。彼らはどのように推論を行っ

たのであろうか。9名のうち5名は、文章の主題が「ノー残業デー月間」であることと「月間は、一カ月間行われるイベントを指す」という意味論的含意に言及していた。また、9名のうち6名が後続する文にある「三十日」に、9名のうち3名が下線部と同一文中の「次の日」に言及していた。これらのことから、正答を答えた協力者は、文章の主題や語の意味論的含意、前後の言語的コンテキストを主としたコンテキスト的想定を用いて推論を行った様子が窺える。

- (33) この前は、6月はノー残業デー月間。だから、一カ月間行われているイベントです。あの、後ろにも、これは30日まで行われる。だから、この一日は、毎月のはじめ、ついたちだ と思います。 (G 中級 SPOT70 点 - 中国語 - 発話 35)¹
- (34) この文のなかで、次の日と書いてありました。そして、このあと30日までと書いてありました。それは、たぶん、時間と関係あると思います。ですから、絶対具体的なことだ と思います。 (E 中級 SPOT74 点 - 中国語 - 発話 66)

また、「a. 一日 (ついたち)」と答えた協力者9名のうち4名の発話から、もう1つの読み「一日 (いちにち)」を当てはめ、「一日 (ついたち)」が適切であることの確認を行った様子が窺える。

- (35) 一日 (いちにち)の可能性もありますけど、文脈というか意味がちょっと通じない。一日 (いちにち)、社員に説明のチラシが配られ、次の日からはじまった。一日 (いちにち) 説明のチラシを配るのは、ちょっとおかしい。文章の意味自体も読んだら分からなくなる。 (B 中級 SPOT73 点 - ベトナム語 - 発話 69)
- (36) 説明のチラシを配ることは、一日 (いちにち)、長い時間は必要ない。説明のチラシを配るのは、すぐ終わるから、これは時間の意味ではなくて、日、一日 (ついたち)のことを指しているかな。あと、ここも、次の日から。次の日からなら、もし、ここが、一日 (いちにち)なら、次の日はどんな日か。ここでは説明がないので、文章は読めないになってしまうかな。 (H 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 39)

誤答である「b. 一日 (いちにち)」、「c. 前の日」と答えた協力者は、それぞれ1名ずつであった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。「b. 一日 (いちにち)」と推論した協力者Iは、先行する文の中でも、下線部のより近くで用いられた「ノー残業」というコンテキストを当てはめ、下線部の書き手が意図した意味は「一日 (いちにち)」であると解釈した様子が窺える。また、「一日 (いちにち)」という意味を最初に思い浮かべ、それ以外は考えなかったとも報告している。

- (37) 一日 (いちにち)で、何の仕事をするかの取り組み。今日、何の仕事をしなければならぬか、何時までに何をしなければならぬか説明すること。ノー残業だから、仕事の終わり時間を必ず守らなければならない。それで、取り組みが必要なので、一日 (いちにち)

¹ 括弧内は、前方から順に協力者 ID、日本語習熟度、SPOT 得点、母語、発話番号を示している。発話番号の「発話」は語用論的推論課題のインタビューの発話を、「事後」は事後インタビューの発話を表わしている。

で必ず何をするかを、一日（いちにち）で守らなければならない。

（I 中級 SPOT69 点 - マレー語 - 発話 29）

(38) 一日（ついたち）、思いませんでした。最初から、一日（いちにち）と思いました。

（I 中級 SPOT69 点 - マレー語 - 事後 3）

また、「c. 前の日」と答えた協力者 C は、下線部と同一文にある「次の日」に着目し、「次の日」と「ある日」は共起関係にあるという言語的知識を基に、「One day」「ある日」という意味であると推論を行ったことを報告している。しかし、「ある日」とした場合、意味が成り立たないと判断し、「ノー残業デーの説明のチラシが配られ、次の日から始まった。」という言語的コンテキストを基に「前の日」と推論したことを報告している。「前の日」という解釈は、局所的な理解としては正しいが、一か月の流れについて説明する書き手の意図とは異なる解釈である。また、協力者 I と同様に、「前の日」という意味以外は考えなかったと報告している。

(39) 前の日の意味だと思います。One day、ある日と考えましたが、すこしおかしい。この日でノー残業デーの説明のチラシが配られ、次の日から始まった。次の日から 30 日まで残業をしないの意味と思いますから。この前の日に先に説明をします。

（C 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 59）

(40) 月のはじめ、最初の一日の意味ですか。さっきは思ったことがありません。たぶん「次の日」を見たから。「ある日」の後に「次の日」と続くのをよく聞きます。

（C 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 事後 2）

曖昧性の除去では、11名のうち9名が正しい意味の解釈に至った。正しい意味の解釈を行った協力者は、文章の主題を把握し、その主題と共に語の意味論的含意や前後の言語的コンテキストを主としたコンテキスト的想定を基に推論を行ったこと、また正しい意味の解釈を行った一部の協力者にとって同形異音語であることが明示的であり、競合する意味を当てはめて、適切さの確認を行ったことがわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、直近で用いられた言語的コンテキストや共起表現に関する言語的知識を優先した推論を行い、書き手の意図した意味とは異なる解釈に至ったことがわかった。また、誤った意味の解釈を行った協力者は、何れも一つの解釈以外は考えなかったと報告している。

5.2 飽和（代名詞）

文章 2 は、飽和が求められる文章であった。ここでは、明示的に手続きをコード化する「代名詞」を扱った。読み手は、代名詞「彼」が指す対象を特定することが求められる。また、ここで扱った代名詞は、間接照応である。つまり、代名詞に対応する指示対象が直接的に理解されず、間接的な推定が求められる（山梨，2017）。下線部「彼」の指示対象は明示的に示された「恋人」であるが、恋人は性に関して中立の名詞であるため、それだけでは飽和の処理としては不十分である。読み手は「妹」が女性であることと、その恋人は異性であることが多いという背景知識を

基に「恋人」と「彼」を結びつける必要がある。

表 4 飽和（代名詞）における回答分布

		回答	
文章 2	飽和（代名詞）	a. 妹の恋人 10名	b. 私の恋人 1名

正答である「a. 妹の恋人」と答えた協力者は 10 名であった。彼らは、どのようにして推論を行ったのであろうか。10 名のうち 6 名が「妹にも恋人がいて、彼は」と「彼」が「妹にも恋人がいて」に接続されていることに言及していた。また、10 名のうち 5 名が「その人から紹介してもらったことがきっかけである。」という後続する文に言及し、10 名のうち 1 名が「彼の前には妹という語と恋人という語しかない。」ということに言及していた。これらのことから、正答を答えた協力者は、文構造や代名詞に関する言語的知識、そして後続文の言語的コンテキストを主としたコンテキスト的想定を用いて推論を行った様子が窺える。

- (41) この文。「妹にも恋人がいて、彼は」。接続だから、この文、妹の恋人だと思います。そして、最後に、その人から紹介してもらったことがきっかけである。この紹介。妹の恋人から、この筆者の妹の恋人は恋人を筆者に紹介した。

(C 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 11)

- (42) 彼、この文の中で初めて彼が出たの文をみて、彼の前に妹にも恋人がいて。これ「いて」のあとは、句点じゃなくて読点であるから、彼と関係がある文だと思って。その彼は妹の恋人だと考えました。

(D 中級 SPOT78 点 - 中国語 - 発話 7)

- (43) 彼の前に、妹と恋人、二つの単語しかないのでも、もし妹を指すならば、彼女という言葉を使います。だから、彼は、妹の恋人を指しています。

(J 上級 SPOT81 点 - 中国語 - 発話 3)

また、「a. 妹の恋人」と答えた協力者 10 名のうちの 1 名の発話から、直前にある「妹」を当てはめ、「妹の恋人」が適切であることの確認を行ったことが窺える。

- (44) この前の言葉は、妹にも恋人がいて。普通は、妹に彼は使わないと思います。もし、彼は妹の場合は、恋人がいることは紹介しないと思います。もし直接に、妹が紹介してくれた。わざわざ、恋人については述べませんと思います。(F 中級 SPOT72 点 - 中国語 - 発話 5)

さらに、「a. 妹の恋人」と答えた協力者 10 名のうちの 1 名の発話から、最初に推論によって得た解釈を後続する言語的コンテキストに基づいて再解釈を行い、解釈を修正したことが窺える。

- (45) 彼は、最初考えたのは、私の恋人です。それをやめたのは、その人から紹介してもらった。私の恋人から何を紹介してもらったのか、それがきっかけで起こったことは、ここには説明されていない。できるのは、私の恋人ができたことです。

(H 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 5)

誤答である「b. 私の恋人」と答えた協力者は1名であった。協力者Iは、冒頭にある「そんな私にも、最近恋人ができた。」という言語的コンテキストに着目して推論を行ったことを報告している。冒頭で「私には恋人がいる。」という想定を得たことから、「恋人の男性」という意味の「彼」との意味的関連性の解釈が容易となり、呼び出し可能性が高かったと考えられる。このように「彼」を「私の恋人」と解釈した場合、下線部「彼」の直前にある「妹にも恋人がいて」という箇所や後続する「その人から、紹介してもらったことがきっかけである。」という文との意味的つながりが保てない。しかし、協力者Iは、その点について言及していないことから、これらの文を読み飛ばしたか無視をした様子が窺える。関連性理論では、期待を満たす最大の文脈効果が得られた場合、そこで推論は停止するとされている。また、新情報が既存のどの想定とも結びつかない場合や新情報が既存の想定の高さに影響しない場合、そして、新情報が既存の想定を否定する事柄であっても既存の想定を覆すには弱すぎる場合は、文脈効果を持たないと判断される。これらのことを踏まえるならば、以下のことが考えられる。読み手にとって期待を満たす文脈効果が得られた場合、その想定に対する確信度が高く、そこで推論が停止する。その想定に対して意味的つながりが保てない前後の言語的コンテキストが存在しても、想定に対する確信度が高いため、それらの言語的コンテキストは文脈効果が期待できないと判断され、読み飛ばされたり無視されてしまう。このように解釈の確信度が高い場合、再解釈を促す新たな証拠が与えられても、読み飛ばされたり無視されてしまい、誤った解釈のまま読み進められる可能性が高い。

(46) 彼は、私の恋人。最初の文は、最近、恋人ができただから。

(I 中級 SPOT69 点 - マレー語 - 発話 3)

飽和（代名詞）では、11名のうち10名が正しい意味の解釈に至った。代名詞は、明示的に手続きをコード化するため、解釈の正誤にかかわらず、協力者は推論の方向性について理解していた様子が窺えた。正しい意味の解釈を行った協力者は、当該文の文構造や代名詞に関する言語的知識、後続文の言語的コンテキストによるコンテキスト的想定を基に推論を行ったこと、また、曖昧性の除去と同様に、競合する意味を当てはめて、適切さの確認を行ったことや、後続する言語的コンテキストを基に再解釈を行い解釈の修正を行ったことがわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、冒頭の言語的コンテキストから得られたコンテキスト的想定を基に推論を行い、該当箇所の前後の言語的コンテキストを読み飛ばしたか無視をした可能性が高いことがわかった。

5.3 飽和（指示詞）

文章3は、飽和が求められる文章であった。ここでは、明示的に手続きをコード化する「指示詞」を扱った。読み手は、指示詞が指す対象を特定する必要があるが、文章2と同様に、ここで扱った「指示詞」は、間接照応である。下線部「それまで」は「妻が駅に着くまで」を指すが、先行詞として明示的に記述されていない。そのため、読み手は「妻に駅に迎えに来るよう頼まれており現在待っているならば、妻は駅に来るはずである。」と推論する必要がある。

表5 飽和（指示詞）における回答分布

		回答	
文章3	飽和（指示詞）	a. 妻が来るまで（妻を迎えに行くまで）	10名
		b. コーヒーが来るまで	1名

正答である「a. 妻が来るまで（妻を迎えに行くまで）」と答えた協力者は10名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。10名のうち7名が「妻から駅まで迎えに来てほしいと頼まれた」に、10名のうち7名が「待ちながら」について言及していた。また、10名のうち2名が「明日の夕方までに終わらせなければならない仕事があった」に言及していた。これらのことから、正答を答えた協力者は、前後の言語的コンテキストから得たコンテキストの含意を主としたコンテキスト的想定を用いて推論を行った様子が窺える。

(47) まず、この仕事は明日の夕方までに終わったほうがいいですから、ここで待ちながら。でも、妻から彼女を待っている願いをもらったから、この、それまでは、妻が来るまでの意味だと思います。 (C 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 18)

(48) その前は、「ここで待ちながら、それまで」。「それまで」は、何かを待っている感じがします。「まで」は、この後、何かが起こるなので、この前の文章の中は、妻が駅に来ることとはまだ起こっていませんが、それ以外は、全部起こったなので。

(F 中級 SPOT72 点 - 中国語 - 発話 10)

また、「a. 妻が来るまで（妻を迎えに行くまで）」と答えた協力者10名のうちの3名の発話から、競合する意味を当てはめ、自身の推論が適切であるか否かを確認した様子が窺える。

(49) 注文したコーヒーを待っていたなんで、コーヒーを待っていたもありうると思います。でも、妻を迎えに行くことのほうが可能性が高い。難しい。コーヒーを待っていたも全然いいと思いますけど。注文したコーヒーを待っていた。ここで待ちながら、それまでに。注文したコーヒーを待っていたに変更していいですか。注文したコーヒーを待っていた。待ちながら。え、そんなに長い。そんなに長い。変ですかね。すみません。やっぱり、妻を迎えに行くことにします。 (B 中級 SPOT73 点 - ベトナム語 - 発話 17)

(50) コーヒーを待っていた。そうですね。これは、違うかな。うーん。やはり、妻が来るまでのことです。そっちのほうがいいと思います。カフェでも仕事ができます。だから、ここで、カフェだから、私が妻が要求がくるまでは、私は家で仕事を終わらせたいでやっているけれど、妻がそういったら、仕方がないから、駅の付近のカフェで仕事を終わらせるになってしまう。 (F 中級 SPOT72 点 - 中国語 - 発話 12)

誤答である「b. コーヒーが来るまで」と答えた協力者は1名であった。協力者Aの発話からは、冒頭にある「注文したコーヒーを待っていた。」という言語的コンテキストや後続する複数の言語的コンテキストから得られた「彼はカフェにおり、妻はカフェにいない。」というコンテ

ト的含意を基に推論を行ったことが窺える。「妻から駅まで迎えに来てほしいと頼まれたのだ。」という文の存在は認識しているものの、「駅にあるカフェで」という箇所を読み飛ばしたか無視をして「彼は駅にいない。」と判断したため、冒頭の言語的コンテキストと他の言語的コンテキストから得たコンテキスト的含意を優先した解釈を行った様子が窺える。ここでも、飽和（代名詞）で誤答を答えた協力者と同様に、読み手にとって期待を満たす文脈効果が得られたため推論が停止したか、文脈効果を得た想定に対して意味的つながりが保てない前後の言語的コンテキストが存在しても、想定に対する確信度が高いため、それらの言語的コンテキストは文脈効果が期待できないと判断して読み飛ばしたり無視をして、誤った解釈のまま読み進めた可能性が高い。

- (51) 最初は、注文したコーヒーを待っていた。あとで、あの妻の話。駅まで迎えにきてほしい。でも、彼は駅にいないから。カフェで一人。あと、ここで待ちながら。妻を待っているそれまではコーヒーの話。でも、妻は今、彼といないから、それまでの時間は、何を待つか。それは、コーヒーだけ。 (A 中級 SPOT74 点 - マレー語 - 発話 20)

飽和（指示詞）では、11名のうち10名が正しい意味の解釈に至った。指示詞は、代名詞と同様に、明示的に手続きをコード化するため、正誤にかかわらず、協力者は推論の方向性について理解していた様子が窺えた。正しい意味の解釈を行った協力者は、前後の言語的コンテキストによるコンテキスト的想定を基に推論を行ったこと、また飽和（代名詞）と同様に、競合する意味を当てはめて、適切さの確認を行ったことがわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、部分的に言語的コンテキストを読み飛ばしたか無視をしたため、ここでは不適切となる冒頭文で得たコンテキスト的含意を主としたコンテキスト的想定を基に推論を行ったことがわかった。

5.4 飽和（省略）

文章4は、飽和が求められる文章であった。ここでは明示的に手続きをコード化する省略を扱った。下線部「真っ赤だよ」は、主体「スープが」が省略されており、読み手は主体が何であるかを推定し補完する必要がある。なお、文章4は、関連性の期待を満たすものとしてある解釈を受け入れた後で、その解釈が実は間違っただけのものであるとわかる文章の構成となっている。

表6 飽和（省略）における回答分布

		回答	
文章4 飽和（省略）	a. スープが真っ赤	3名	b. 顔が真っ赤 8名

正答である「a. スープが真っ赤」と答えた協力者は3名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。3名全員が、筆者が「飲み過ぎてしまったみたいだ。」と言った後に「いや、お前、辛いのが苦手だった。このスープ、かなり辛そうだけど。」と友だちが答えて否定したことに言及していた。また、3名のうち1名が「この文は、友だちから言われたこと」であることに、3名のうち1名が「辛い料理を食べると顔が赤くなってしまうこと」に言及していた。これらのことから、正答を答えた協力者は、文章の構成を正確に把握し、再解釈を促す言語的コンテ

トや辛い料理に関する背景知識を用いたコンテクスト的想定を基に推論を行った様子が窺える。

- (52) なぜかという、この文章は友達から言われてたので。友だちは、3行目、お前辛いのが苦手だったろ。このスープ辛そうだけどと言っていたので。つまり、友だちは、自分の顔を見て、顔が赤くなってしまってから、韓国の料理が苦手から、顔が赤くなってしまわないかなと思います。 (B 中級 SPOT73 点 - ベトナム語 - 発話 30)
- (53) 前、友人が私に向けて、赤、真っ赤とって、あと、私自分の解釈は、自分が酒に弱いので、酒を多く飲んでから、自分が顔が赤になるという、私の考えです。けど、友だちは、そうではなくて、辛いのが苦手だろ、このスープがかなり辛そうだ、と友だちがこの言葉を言っていることで、友だちが前の言葉で、この赤を指しているのは、このスープのこと。このスープの色です。 (H 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 20)

誤答である「b. 顔が真っ赤」と答えた協力者は8名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。8名のうち5名が「私はお酒に強いほうではない。」に言及していた。また、8名のうち4名が「お酒に弱い人は、お酒を飲むと顔が赤くなること」に言及し、8名のうちそれぞれ2名が、筆者の「飲み過ぎてしまったみたいだ。」という発言や「あ、うん。これぐらいなら大丈夫。」という発言に言及していた。これらのことから、誤答を答えた協力者は、テキスト前半の言語的コンテクストと飲酒に関する背景知識を用いたコンテクスト的想定を基に推論を行ったことが窺える。また、再解釈を促す言語的コンテクスト「いや、お前、辛いのが苦手だったろ。このスープかなり辛そうだけど。」という文について言及した協力者が少なかったことから、この文を読み飛ばしたか無視をした様子が窺える。ここでも、読み手にとって期待を満たす文脈効果が得られたため推論が停止した可能性や、文脈効果を得た想定に対して意味的つながりが保てない前後の言語的コンテクストが存在しても、想定に対する確信度が高いため、それらの言語的コンテクストは文脈効果が期待できないと判断され、読み飛ばされたり無視されてしまった可能性が高い。また、「これぐらいなら大丈夫。」という後続する文について認識していても、この文を理解する際に「顔が赤い」という誤った解釈をコンテクスト的想定として用いたために、誤って自身の解釈を肯定するものとして解釈し、誤った解釈をさらに強化した様子も窺えた。

- (54) 次の文は、お酒に強い方ではないからです。あとは辛い物が苦手と言っていましたが、あの、これぐらいなら大丈夫と言われました。その理由で、あと、真っ赤は、お酒のせいだと思いました。 (A 中級 SPOT74 点 - マレー語 - 発話 18)
- (55) 楽しくお酒を飲んでいて。しかし、後ろは、私がお酒に強いほうではない。で、普通お酒に弱い人は、お酒を飲んだら、顔も赤になるからです。 (F 中級 SPOT72 点 - 中国語 - 発話 16)
- (56) 前は、お酒を飲んで。普通は、お酒を飲んで顔が真っ赤になる。これは普通だと思いますから、ここは、真っ赤とは、顔の色だと思います。 (G 中級 SPOT70 点 - 中国語 - 発話 17)

飽和（省略）では、11名のうち3名が正しい意味の解釈に至った。省略は、指示詞や代名詞と同様に、明示的に手続きをコード化するため、解釈の正誤にかかわらず、協力者は推論の方向性について理解していた様子が窺えた。正しい意味の解釈を行った協力者は、文章の構成を正しく把握し、再解釈を促す言語的コンテキストに気づき、再解釈を行ったことがわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、文章の構成を正しく把握できず、再解釈を促す言語的コンテキストを読み飛ばしたか無視をして、冒頭に得た想定とそれに関連する背景知識を基としたコンテキスト的想定を用いて推論を行ったことがわかった。また、誤った解釈を行った場合、その解釈を基としたコンテキスト的想定を基に後続する文を理解するため、誤った解釈が強化されたり、誤った解釈のまま読み進められるといった「誤った推論の連鎖」が起こることがわかった。

5.5 アドホック概念（語彙的拡大）

文章5は、アドホック概念構築が求められる文章であった。ここでは語彙的拡大を扱った。下線部「箱」は、概念をコード化するものである。また、当該テキストでは「箱」の語義を拡大させ「分類」や「カテゴリー」というアドホック概念として用いられている。読み手は、語義の拡大を行い、文章に合った意味を推定する必要がある。

表7 アドホック概念（語彙的拡張）における回答分布

		回答	
文章5	アドホック概念 (語彙的拡張)	a. 分類・カテゴリー 9名	b. 箱 2名

正答である「a. 分類・カテゴリー」と答えた協力者は9名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。9名全員が「仕事を重要かどうか、急ぐかどうかで分けるという話をしていること」に言及していた。また、9名のうちそれぞれ1名が、テキスト中の「頭の中で整理する」という箇所、「自身も4つに分類したことがある」という実体験について言及していた。これらのことから、前後の言語的コンテキストや自身の実体験によるコンテキスト的想定を基に推論を行った様子が窺える。

(57) 直前の文章と直後の文章から推測しました。重要かどうかと、急いでしなければならないかどうかと考えて仕事を4つの箱に分けるなので、重要と、急いでしなければ。あの一これは、仕事の急ぐの可能性という意味がわかりました。その後も、重要なことは、最初に、そして、重要ではなく急いでない仕事は後でやるようにするそうだ。このように、分けている。なので、その優先度、重要度の仕事だと思います。

(B 中級 SPOT73 点 - ベトナム語 - 発話 37)

(58) このあとの重要で急いでなければならない仕事のような、重要ではなく急いでいない仕事と分類のような話が出ていますから。だから、箱は、分類だと思います。

(C 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 33)

- (59) 本当の箱ではないは、私も4つに分けることをしたことがあるので、この4つは、カテゴリーの意味だと思います。 (F 中級 SPOT72 点 - 中国語 - 発話 19)

また、「a. 分類・カテゴリー」と答えた9名のうち3名の発話から、競合する意味を当てはめ、自身の推論が適切であるか否かを確認した様子が窺える。

- (60) これは、先輩からおすすめされた仕事のやり方ですから、たぶんこれは、ただ、なんか仕事を良くできるやり方。たぶん、本物の箱ではない。本物の箱であるなら、いいやり方ではないと思います。 (E 中級 SPOT74 点 - 中国語 - 発話 36)
- (61) 実際に物理的な箱ではない。物理的な箱だったら、前で言っていることは合わないと思います。前の文章で、頭の中で整理することと言っている。 (H 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 23)

誤答である「b. 箱」と答えた協力者は2名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。協力者 A は、正答を答えた協力者と同様に「仕事を重要かどうか、急ぐかどうかで分けること」に言及しているが、「仕事を分類する箱を実際に見たことがある」という実体験を基としたコンテクスト的想定を基に推論を行ったことが窺える。一方、協力者 D も、「仕事を重要かどうか、急ぐかどうかでわけること」に言及しているが、「仕事」に関する背景知識を基に書類と関係がある事柄というコンテクスト的想定を基に推論を行った様子が窺える。

- (62) その箱は、あの一。この仕事を分けてる。重要、急いでしなければならない。あと重要ではなく。あと、私は、そのこと見たことがあります。テーブル見たいです。その仕事は、このテーブルを作って、どっちの仕事が、箱 1、箱 2、箱 3、箱 4。テーブルに分けます。 (A 中級 SPOT74 点 - マレー語 - 発話 47)
- (63) この先輩が、この人に仕事を重要かどうかと、急いでしなければならないなどを4つに分けて、仕事をするやり方を教えて、仕事の話だから、この箱は、書類と関係あるだと思います。 (D 中級 SPOT78 点 - 中国語 - 発話 48)

アドホック概念（語彙的拡張）では、11名のうち9名が正しい意味の解釈に至った。正しい意味の解釈を行った協力者は、前後の言語的コンテクストや自身の実体験を用いたコンテクスト的想定を基に推論したこと、また、競合する意味を当てはめて、適切さの確認を行ったことがわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、正答を答えた協力者と同じ言語的コンテクストに着目しているものの、「頭の中で整理することだ。」という箇所を読み飛ばしたか無視をして、実体験や背景知識といった想定を用いたコンテクスト的想定を優先して推論したことがわかった。このことから、第二言語としての日本語の文章読解の場合、一部の読み手にとっては、文章から得られる情報に比べて、読み手の実体験や背景知識による想定のほうが、より確信度が高い想定となる可能性が高いということがわかった。

5.6 アドホック概念（語彙的縮小）

文章6は、アドホック概念を求める文章であった。ここでは、語彙的縮小を扱った。下線部「ところ」は、概念をコード化するものである。また、当該テキストでは、「ところ」の基本義を縮小させた「会社」というアドホックな意味で用いられている。読み手は、語義の縮小を行い、文章に合った意味を推定する必要がある。

表8 アドホック概念（語彙的縮小）における回答分布

		回答	
文章6 アドホック概念 (語彙的縮小)	a. 会社	6名	b. 国
			5名

正答である「a. 会社」と答えた協力者は6名であった。彼らは、どのように推論を行ったのだろうか。6名全員が「ボーナスの話をしていること」に言及し、6名のうち5名が「ボーナスをもらう場所は会社であること」に言及している。また、6名のうち3名が「サラリーマン同士の会話であること」に言及し、6名のうちそれぞれ1名が、「ところ」は場所や物事を指す用法があるということや、「前半は日本のボーナス、後半は他の国のボーナスについての内容である」という文章の構成について言及している。これらのことから、文章の主題や構成、言語的コンテキスト、そして言語的知識や主題に関連する背景知識によるコンテキスト的想定を基に推論した様子が窺える。

- (64) 最初の「ところ」をみて、この「ところ」は、何かわからなかった。私が日本語を勉強をしたとき、「ところ」は、場所と物事を指すとわかりました。で、最後の「君のところはボーナスがあるのかい」。これを見て会社だと、職場だと直接出ました。ボーナスは、お金と関係あるから、会社を選びました。(D 中級 SPOT78 点 - 中国語 - 発話 60)
- (65) ボーナスは、だいたい会社から職員に渡したものです。もし、自分一人で働いているなら、ボーナスとは言えない。だから、このところは、自分が働いている会社だと思います。(G 中級 SPOT70 点 - 中国語 - 発話 22)
- (66) サラリーマン同士ということが書いてあって、そこから考えてみると、サラリーマン同士の会話なんですから、君のところは、会社だと思います。(K 上級 SPOT82 点 - 韓国語 - 発話 16)
- (67) 他は国の可能性もありますが、他の国の話は、後半で話しているけど、前半は、たぶんただ日本のボーナスの話をしているだけで。そう考えて、このところは、国じゃなくて、会社だと思います。(H 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 28)

誤答である「b. 国」と答えた協力者は5名であった。彼らは、どのように推論を行ったのだろうか。5名全員が「ボーナスのことについて話していること」、そして「後半でアジアやヨーロッパなど様々な国の話が出てくること」に言及している。また、5名のうち2名が、テキストの最後にある「君のところは、ボーナスがあるのかい。」という質問について言及している。これら

のことから、文章の構成を正しく理解せず、後続する言語的コンテキストの一部を優先したコンテキスト的想定を基に推論した様子が窺える。

- (68) あとで色々なアジアとかヨーロッパとか国の話がいっぱいありますから。そして、最後に君のところはボーナスがあるのかいという質問がありますから。

(C 中級 SPOT76 点 - 中国語 - 発話 43)

- (69) ところとは、国の可能性が高い。でも、よくわからない。会社の可能性もあると思います。けど、ボーナスの時期。後ろには、日本では、ヨーロッパではと書かれていますので、国のことを指す可能性が高いと思います。

(J 上級 SPOT81 点 - 中国語 - 発話 21)

アドホック概念（語彙的縮小）では、11名のうち6名が正しい意味の解釈に至った。正しい意味の解釈を行った協力者は、文章の主題や構成、言語的コンテキスト、そして言語的知識や主題に関連する背景知識によるコンテキスト的想定を基に推論したことがわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、主題を把握しているものの、文章の構成を正しく把握せず、後続する言語的コンテキストの一部を優先したコンテキスト的想定を基に推論したことがわかった。

5.7 自由拡充

文章7は、自由拡充を求める文章であった。下線部「部長、飲むよ。」は、対象「お酒を」が省略されており、読み手は対象を推論し補完する必要がある。それに加えて、ここでは「たくさん」といった副詞を補完することが求められる。対象の「お酒を」の補完が言語的要素の要求であり、推論の方向性を明示的に示すものであるのに対して、「たくさん」といった副詞の補完は、自由に語用論的に要素を補うものであるため、推論の方向性を明示的に示すものではない。

表9 自由拡充における回答分布

		回答	
文章7	自由拡充	a. 部長はお酒をたくさん飲む 7名	b. 部長、飲みましょう（お酒を促す呼びかけ） 4名

正答である「a. 部長はお酒をたくさん飲む」と答えた協力者は7名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。7名のうち6名が「先輩の言ったとおり、なかなか家に帰らせてもらえず、タクシーで家に帰ったこと」に言及している。また、これに関連して7名のうち4名が「タクシーで家に帰ったということは、筆者はお酒を飲みすぎて自分で家に帰れなかったということを意味すること」に、7名のうち2名が「部長が部屋を出て行ったのを確認してこっそり」という語句に言及している。これらのことから、前後の言語的コンテキストや関連する背景知識を用いたコンテキスト的含意を基に推論した様子が窺える。

- (70) 先輩の言ったとおり、そして、なかなか家に帰らせてもらえず、タクシーで家に帰った。あの部長と一緒にお酒を飲んで、あと酔っぱらって、自分で家に帰れなかった。そして、

タクシーで帰った。部長とたくさんお酒を飲んだからです。お酒をたくさん飲むよのこと。

(A 中級 SPOT74 点 - マレー語 - 発話 57)

- (71) 後ろに、先輩のいったとおり、その日はなかなか帰らせてもらえずタクシーで家に帰った。これは、その日、私がたくさんお酒を飲んでしまったということを指すと思います。そして、部長が部屋を出ていったのを確認して書いてありますので、それは先輩が部長のことを、部長が、そんなにお酒を飲まない人なら、部長が部屋を出ていったのを確認する必要がないので。

(J 上級 SPOT81 点 - 中国語 - 発話 26)

- (72) まず、お酒の話があって、飲むということはお酒だと思いますけど、なかなか帰らせてもらえずタクシーで家にかえったとありますけど、部長が酒に強いから、なかなか家に帰れなかったということじゃないかなと思いました。

(K 上級 SPOT82 点 - 韓国語 - 発話 19)

誤答である「b. 部長, 飲みましょう (飲酒を促す呼びかけ)」と答えた協力者は 4 名であった。彼らは、どのように推論を行ったのであろうか。4 名全員が、「部長とお酒を飲む」ということに言及しているが、省略されている「お酒を」という語句のみを補足し下線部の文を字義的に解釈した様子が窺える。また、「部長が部屋を出て行ったのを確認してこっそり」という語句について言及がないため、読み飛ばしたか無視をしたことが窺える。

- (73) なぜかという、この前の文章は、全部、部長に集中している。部長は、どうやって酔っ払いになれるかという、先輩が部長にたくさんお酒を飲ませるしかないので、そのまま誘いの意味。先輩が部長に、お酒を飲んでください、飲んでくださいと言っている。

(F 中級 SPOT72 点 - 中国語 - 発話 29)

- (74) 部長飲むよと言ったら、部長にたくさんお酒を飲んで欲しいということ。部長と一緒にお酒を飲む。後ろに「よ」があるので、一緒に何々をするという意味で、だから、後ろにも、自分もなかなか家に帰らせてもらえず。帰らせてもらうのは、部長から命令だと思います。もし、自分が部長とお酒を飲んだら、たぶん、なかなか部長から家に帰らせてもらえないと思います。

(G 中級 SPOT70 点 - 中国語 - 発話 28)

自由拡充では、11 名のうち 7 名が正しい意味の解釈に至った。正しい意味の解釈を行った協力者は、言語的コンテキストや関連する背景知識やコンテキスト的含意を用いたコンテキスト的想定を基に推論した様子がわかった。一方、誤った意味の解釈を行った協力者は、部分的に言語的コンテキストを読み飛ばし、言語的知識や前後の言語的コンテキストを基としたコンテキスト的想定を基に文をそのまま字義的に解釈したことがわかった。また、11 名全員が、推論の方向性を明示的に示す省略において対象「お酒を」の補完ができたが、推論の方向性を明示的に示さない自由拡充においては、副詞「たくさん」について 4 名が補完できなかった。このことから、推論の方向性を明示的に示さない自由拡充は、省略といった推論の方向性を明示的に示すものと比べて推論を行うことが困難である可能性が高いことがわかった。

6. まとめ

本研究の目的は、日本語学習者は、どのようにして書き手の意図に沿ったコンテキストを選び、書き手の意図した意味を理解しているのか、その際、どのような困難点があるのかについて明らかにすることであった。本研究では、中上級日本語学習者に対して関連性理論の発展、すなわち、曖昧性の除去、飽和（代名詞・指示詞・省略）、アドホック概念構築（語義的拡大・語義的縮小）、自由拡充について問う課題を与えて検討を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

まず、日本語学習者は、どのようにして書き手の意図に沿ったコンテキストを選び、書き手の意図した意味を理解するのかについて述べる。調査の結果から、日本語学習者が推論を行う際に用いるコンテキストは、文章の主題や言語的コンテキストだけでなく、コンテキストの含意や文章の構成、言語的知識、背景知識など幅広いことが明らかとなった。また、代名詞、指示詞、省略といった明示的に手続きをコード化するものについては、それぞれが示す推論の方向性を理解し、要求される推論を行う様子が確認された。さらに、複数のコンテキストを想定し、それぞれのコンテキストを文章に当てはめて、何れのコンテキストを用いた解釈が正しいのかの判断を行うことや、誤った解釈が読み手自身に起因するのか文章の構成に起因するのにかかわらず、初めに得た解釈に対して意味的なつながりが保てないような新たな情報が与えられた場合、解釈の修正を行うことが明らかとなった。

次に、日本語学習者が語用論的推論を行う際、どのような困難点があるのかについて述べる。調査の結果から、複数のコンテキストの想定が困難であり、特定のコンテキストのみを想定した解釈を行うことや、言語的コンテキストよりも背景知識や実体験といったコンテキストに対する確信度が高く、これらのコンテキスト的想定を優先した推論を行う傾向にあることが明らかとなった。また、推論の方向性を明示的に示さない自由拡充では、推論の必要性に気づくことが困難であり、誤った解釈を行う可能性が高いことが明らかとなった。さらに、誤った解釈が自身に起因するのか文章の構成に起因するのにかかわらず、初めに得た解釈を修正したり、棄却して再解釈を行うことが困難である可能性が高いことが明らかとなった。具体的には、初めに得た解釈の確信度が高い場合は、初めに得た解釈と意味的なつながりが保てない言語的コンテキストが存在しても、それらの言語的コンテキストは文脈効果が期待できないと判断され、読み飛ばされたり無視をされてしまう傾向にあることが明らかとなった。また、誤った解釈を行った場合、その誤った解釈を基としたコンテキスト的想定を用いて後続文を読み進めるため、後続する情報を誤った解釈を強化する情報として捉えるとといった誤った推論の連鎖が起こることが明らかとなった。

参考文献

- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*. Oxford: Blackwell Publishing. (内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子 (訳) 2008『思考と発話—明示的伝達の語用論—』東京：研究社.)
- 藤原未雪 (2017a) 「上級日本語学習者が小説を読むときに見られる誤読—中国語を母語とする大学院生の事例から—」『読書科学』59(2): 43-57.

- 藤原未雪 (2017b) 「上級日本語学習者による学術論文の読解における語義の解釈過程」『一橋大学国際教育センター紀要』8: 119-132.
- 布施悠子・Dang Thai Quynh Chi (2020) 「空間・数量を表す語の語義把握の方法」石黒圭 (編) (2020), 97-119.
- Halliday, Michael Alexander Kirkwood and Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. Routledge. (安藤忠雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭輔 (訳) 1997 『テキストはどのように構成されるか』東京: ひつじ書房.
- 東森勲・吉村あき子 (2006) 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション—』(英語学モノグラフシリーズ 21) 東京: 研究社.
- 井伊菜穂子・宮内拓也 (2020) 「接続詞による文脈理解の方法」石黒圭 (編) (2020), 143-166.
- 今井邦彦 (2009) 『語用論への招待』東京: 大修館書店.
- 今井邦彦 (編) (2017) 『最新語用論入門 12 章』東京: 大修館書店.
- 石黒圭 (編) (2020) 『文脈情報を用いた文章読解過程の実証的研究』東京: ひつじ書房.
- 劉金鳳・Nguyen Thi Thanh Thuy (2020) 「外来語の語義把握の方法」石黒圭 (編) (2020), 53-71.
- 蒙韞・Nguyen Thi Thanh Thuy (2020) 「固有名詞の語義把握の方法」石黒圭 (編) (2020), 75-93.
- 野田尚史 (2014) 「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』16: 9-14.
- 野田尚史・花田敦子・藤原未雪 (2017) 「上級日本語学習者は学術論文をどのように読み誤るか—中国語を母語とする大学院生の調査から—」『日本語教育』167: 15-30.
- 岡田聡宏 (2011) 「アドホック概念について」『言語・文化・社会』9: 25-45.
- 岡田聡宏・井門亮 (2014) 「省略語・イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』12: 1-29.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and cognition*. Second edition. Oxford: Blackwell Publishing. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) 2015 『関連性理論 (第2版) —伝達と認知—』東京: 研究社.)
- 田中啓行・宮内拓也 (2020) 「指示語による文脈理解の方法」石黒圭 (編) (2020), 169-190.
- 内田聖二 (2013) 『ことばを読む, 心を読む—認知語用論入門—』東京: 開拓社.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1993) Linguistic form and relevance. *Lingua* 90(1-2): 1-25.
- 烏日哲・Dang Thai Quynh Chi (2020) 「和語動詞の語義把握の方法」石黒圭 (編) (2020), 27-48.
- 山梨正明 (2017) 『新版 推論と照応—照応研究の新展開—』東京: くろしお出版.

関連 Web サイト

- 『日本語読解学習支援システム リーディングチュウ太』<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/index.html> (2021 年 3 月 10 日確認)
- 『TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese)』<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/p1.html> (2021 年 3 月 10 日確認)

The Process of Making Pragmatic Inferences in Reading Japanese as a Second Language

SATO Tomoaki

Shimane University

Abstract

This study was conducted to examine how learners of Japanese as a second language select appropriate contexts to understand the meaning intended by the writer and the difficulties they encounter in doing so. To examine the above research questions, a pragmatic inference task and an interview survey were conducted with 11 intermediate to advanced level learners of Japanese. The results revealed how they (a) use a variety of contexts when making pragmatic inferences; (b) assume multiple contexts, obtain multiple interpretations, and apply these interpretations to the text to determine their validity; and (c) reinterpret the text when their interpretation is doubtful. Further, we confirmed that those who make incorrect interpretations do not assume multiple contexts and restrict themselves to a single context, thus obtaining only one interpretation. We also found that it is difficult for them to rectify their incorrect interpretations, and that this is likely to be deeply related to their high degree of certainty about their interpretations and an inability to assume multiple contexts. Additionally, free enrichment is difficult for them because they fail to notice the direction of inference as it is not explicitly stated.

Keywords: text reading, relevance theory, pragmatic inference, proposition expressed, development